

14. ぼくらの場所

各務原市立那加第二小学校

6年 鈴村 陽子 古岡 華歩 増田 成美
中山 祐貴 児玉 理子



敦賀市立栗野小学校

6年 相馬 茉優 江端 恵

それは、太陽がカンカン照りの暑い夏の日のことだった。

「なんだってー！」

ぼくたちは思わずさげんでいた。

ぼくはだいき。ぼくとかずまとえみとさゆりは、小さいころからの友だちでいつもいっしょだ。ぼくたちはいつもの様に虫とりあみとかごを持ち、中央公園に向かっていった。中央公園に着くと、公園がさくで囲まれていた。そこには看板が立っていた。

『八月三日から中央公園を市営住宅に変える工事を行います。……』

「うちの公園をどうする気なんや！ ゆるさへん！」

さゆりが真っ赤な顔で言った。

「うわさには聞いていましたが、まさか本当になるとは……」

かずまも、うで組みをしながら言う。

「私にまかせて！ いい考えがあるわ」

えみがウィンクした。

「よし！ ぼくの家で作戦会議だー！」

「オー！」

ぼくたち四人組はぼくの家に向かった。

「えみ、何かええ考えあるん？」

「うん。あのね、名付けて『お色気アタック大作戦！』。ほら、私ってかわいいでしょ。だから、作業員さんも寄って来ると思うの！ 私が時間をかせぐから、その間にみんなが工事現場にしのびこめばいいんじゃない？ 私って、あったまい〜」

「……」

「うーん。まあいいんじゃないですか」

「ええと思うよ。えみ、かわええし」

「よし。じゃあ、えみ、たのんだぞ。他に何か方法ある？」

「では、ぼくが市長の真似をして、工事現場に電話をかけましょう。電話番号は、〇〇ー△△△△でしたね」

「それ、ええなあ。うちとだいきで、工事現場につっこむわ。ええよな、だいき」

「おう。明日の午後一時に工事現場に集合だ！」

「うん！」

次の日、ぼくたち四人組は工事現場の前に集合した。中には人がいた。

「よし！ 作戦実行だ！」

「エイエイオー！！」

「じゃあ、いってきまーす」

えみが工事現場の中に入っていった。

「わーおにいさん、超かっこいー！」

「えっ？」

工事のおじ……いや、お兄さんたちがおどろいた。

「だから、お兄さんたちかっこいーって言うてるの」

お兄さんたちは、次第にへうへうとほおがゆるんでいった。

「えみさん、なかなかやりますね」

「さあ、ぼくたちも行こう！」

ぼくたちは木の後ろにかくれながら、工事現場にしのびこんだ。

「いやあ、君かわいいね～。何ていう名前？」

「わたし、えみです」

そう言いながら、えみが、こっちに目くばせをしてくる。

「よし、今です！」

かずまが、ぼくとさゆりに指示を出す。

「行くぞ」

「ぼくは、外に残って電話をかけます。それで、工事が中断した時がねらい目です。クレーンの機械を止めて下さい。たのみましたよ」

ぼくとさゆりは、ささっと動いて工事現場の中に入り、木のかげにかくれた。

「よーし、いい調子だ。あとは、かずまが電話して、工事が中断するはずだ！」

「そうやな」

ぼくは、小声でさゆりに話しかけた。木のかげから工事現場をのぞく。木の前を何人がが通り過ぎていって、そのたびにぼくの心臓はドックンドックンと音を立てた。

しばらく木のかげにかくれていると、工事で指示を出していた人のけい帯がなった。

「チャンチャカ♪ チュアカチャカチャーン♪」

「ん？ 何だ？」

ぼくとさゆりは、ドキドキしながら見守る。

「はい。〇〇建設ですが……、あっ、市長さんですか？ はい、はい、工事は今から行うところです。はい、……ええっ！？ 工事は一時中断ですか？ でも……はぁ分かりました」

どうやら、うまくいったらしい。

「おーい。みんな集合！ 今、市長さんから電話があって、工事は一時中断だ！」

「えー、ほんまですか？」

「市長さんからの命令だ！ しょうがないだろう」

「本当にやめていいんですか～？」

工事現場はザワザワ……。みんなが好き勝手にしゃべり始めた。

「みんな工事現場から出えへんで。機械のそうさは難しそうやなあ」

「よし作戦変こうだ！」★

ぼくたちは、公園のすみに集まって相談した。

「では、こうしましょう」

「みんなに公園のよさを知ってもらうことにしよう」

「それは、いい案だね」

全員一致で、しばらく話し合いを続けた。そして、この公園の利用者に声をかけることになった。

「えみたちはあっち、ぼくとかずまはこっちだ」

「よっしゃあ。えみ、がんばろうな」

「おっけい」

「作戦実行」

四人は、公園の近くの住民に声をかけた。

「すいません」

一番に声をかけたのは、ぼく。

「どうしたの」

「実は、中央公園が市営住宅になるんです。ぼくたちは、公園を守りたいと思います」と説明した。すると、

「えっ、そんなの許せないわ。私もあなたたちに協力するわ」

「ありがとうございます」

ぼくは笑顔で答えた。

そのころ、えみたちは…。

「なかなか人がいないなあ」

「あっ、さゆり、だれか来たわ」

「ほんまや、話しかけてみようか」

二人は勇気を出して話しかけた。

「あのう、すいません」

「はい？」

「この公園がつぶされるのをご存じですか」

「いいえ」

「それでね…」

「わかった。協力するよ」

三十分後、四人は合流した。

「みんな、どうだった？」

「たくさん協力してくれたよ。公園にみんなが集まってくれるって」

「そろそろ来てくれるころなんだけど」

四人は市長さんも呼ぶことにした。

十分後。なんと市長さんが来てくれた。

「ぼくらの意見を聞いて下さい」

と、ぼくが言った。

「ぼくたちの利用している公園を住宅にかえないで下さい」

歩行者たちも口々に言った。
「みんなの意見を聞いて下さい」
「公園をこわさないで」
「工事を中止して下さい」
すると、市長さんは、
「もう決まったことなんだ」
と力なく言った。
「大人たちだけで勝手に決めないで下さい」
「そうだ、そうだ」
「これをふまえて考えて下さい」
「ちょっと相談の時間を…」
十分後。
「あっ、市長さんが帰って来たぞ」
「どうになりましたか」
市長さんが重い口を開いた。
「工事は…」
みんなは市長さんにくぎづけだ。
「みなさんの願いどおり取り消しになりました」
みんなから歓声が上がった。
「やったやんみんな」
「嬉しいね」
「やったあ」
「ぼくたちの勝利だ」
そう言ってみんなはハイタッチした。

一か月後。
秋の風がすずしくなってきたころ、
「さゆり、おにごっこしようよ」
「ええで」
「かずまたちもさそおっか」
「うん」
ぼくたちは、あの中央公園でいつものように遊んでいた。
ぼくらの場所で。